

## 第三章 水雷火船、水雷艇兵装艤装

### (附) 驅 潜 艇

(備考)之等船艇ハ驅潜艇ノ外已ニ過去ノ遺物ニ屬スルモ現在ノ大型驅逐艦ノ淵源ヲ語リ之等船艇兵装艤装上ノ思想ノ變遷ヲ示スモノタルガ故ニ其ノ一般ニ就キ簡記スルコトトセリ而シテ其ノ内容亦魚雷方面ノミニ止ム

### 第一節 二十七、八年戰役前時代

明治十年前後歐洲諸海軍國ニ於テ水雷艇建造熱漸次擡頭スルヤ我國ニ於テモ同十二年八月其ノ四隻製造方太政官へ上請セシニ直ニ開届ノ指令アリ越ヘテ十三年一月「ノルデンフィールト」砲、「スパー」水

雷、豫備彈藥等ヲ加へ四隻分計三萬二千八百磅ニテ英國耶社ニ注文セルヲ嚆矢トス之等ノ要目概要左ノ如シ

五六

長サ二九米四、排水量四〇噸、馬力四三〇、罐一、速力一七節

而シテ之等水雷艇(當時ハ水雷火船又ハ水雷船ト稱ス)ハ十三年秋季解體ノ儘英船ニ依リ着邦セシガ其ノ第一隻ハ不取敢組立ヲ開始シ他三隻ハ其ノ儘格納シ第一隻ノ成績ニ依リ組立ノ方針ナリシガ更ニ船體丈ハ三隻共引續キ組立ノコトニ變史セラレタリ斯クテ第一隻ノ竣工セシハ十四年五月ニシテ當時ノ兵裝ハ専ラ外裝水雷ヲ用ヒ副兵器トシテ擲爆藥ヲ有セシニ過ギズ之ヨリ先キ歐洲諸國ニ於テハ水雷艇ニ魚形水雷ヲ兵裝スルノ風アリ我國ニ於テモ之ニ倣フノ必要ヲ認メ種々攻究スルトコロアリ(別紙第一)此ノ間海軍附屬運送船高雄丸ヲ賣却シ要港ニ配スベキ水雷船ノ費用ニ充ツル等ノ窮策ヲ採リシコトアリ尙十八年起工ノ第一震天ニハ其ノ船首ニ船首水雷發射管孔ヲ設ケ翌十九年起工ノ第二震天モ亦同様ノ兵裝ヲ爲スコトトナリ夫々十九年及二十年ニ於テ各竣工(發射管ノ裝備ハ幾分遲延ス)セリ

(備考)第二震天ハ防禦用トシテ専ラ敷設水雷ノ使用ニ鐵裝セラレシガ爲當初水雷孔ヲ設ケザリシガ長浦水雷營長ヨリ教育上必要ナルノミナラズ第一震天故障ノ場合豫備トシテ必要ナリトノ故ヲ以テ第一震天同様水雷孔裝備方上申セルニ對シ允許セルモノナリ

尙十八、九兩年ニ亘リ「スチームベーンズ」「Steam Bunnies」「マインポート」等ノ建造計畫ニ代フルニ小蒸汽船六隻ヲ以テシ獨國ヨリ着ノ小蒸汽船用水雷發射管ヲ裝備スルコトトシ水雷艇ノ不足ヲ補フノ手段ニ出デタリ

明治十八年河村海軍卿ハ三條太政大臣宛海軍擴張ノコトヲ提議シ甲鐵艦八隻以下諸軍艦、水雷運送船四隻一等水雷艇十二隻二等水雷艇三十二隻製造スルヲ要ス若シ經費之ヲ許サザレバ甲鐵艦ノ製造ヲ止メ巡洋砲艦二十二隻水雷艇二十四隻裝甲水雷艇十二隻ヲ新造センコトヲ求メ其ノ一部ノ議就リ翌十九年差當リ水雷艇十六隻ヲ海外ニ注文スルコトトナリ技師山口辰彌等ヲ英佛獨等ニ派シ我職工若干名宛ヲシテ製造技術見習條件ノ下ニ佛國「クルゾー」ノルマン「獨國」シーショウ「社等ニ分配注文シ之等ノ内六隻ハ外國製造本邦組立十隻ハ材料購入ノ上本邦ニテ製造ノコトニ決定セシガ當初ハ一、二等各半數八隻宛ノ豫定ノ處速力二十節ヲ得ル爲全部一等艇(當時ハ五十噸以上ヲ一等艇トセリ)タラシメタリ之等ノ水雷兵裝及要目概要左ノ如シ

艇種	長サ(米)	排水量(トシ)	馬力	發射管	代表艇名
「クルゾー」	三五	九四	五二五	二(藥發)	第五號
同	三四	五三	六五七	同右	第十五號
「シーショウ」	三九	八五	八八六	三(藥發二) 氣發一)	第二十二號

別ニ十九年裝甲水雷裝一隻(小鷹)ヲ英國耶社ニ注文シ橫須賀造船所ニテ組立テ二十一年十月竣工セシガ其ノ兵裝要目概要左ノ如クニシテ蓋シ當時ニ於ケル世界的出色ノモノニ屬ス

長サ五〇米三、排水量二〇二噸、一二〇〇馬力、發射管四門(艇首二、中央、後部各一)、速力一九節

之ヨリ先キ十七年十月二十七日主船局長、軍事局長、水雷局長連名ノ下ニ當時横須賀ニテ組立中ノ第二、第三、第四水雷艇ニ魚雷兵装ヲ施スベキ件ニ就キ次ノ意見書ヲ提出セリ

水雷艇水雷兵装ニ關スル意見

別紙略ノ獨逸出張權少匠司若山鉦吉ヨリ申越セル水雷器ノ件ヲ按ズルニ横須賀造船所ニ於テ組立相成候水雷船ノ速力ヲ一時間十六里トスレバ一分間ノ速力凡五百碼ナリ此ノ距離ヨリ敵艦ノ認ムル處トナリ機砲ヲ以テ烈シク射撃ヲ受クルトキハ其ノ命中一分間ニ五六十發トスルモ機械ヲ損シ或ハ海水浸入シテ終ニ目的トスル敵艦ニ達シ鐵竿水雷ノ功ヲ奏スル能ハザルベシ尤モ暗夜又ハ砲煙ノ未ダ騰ラザルニ敵艦ノ不意ニ出ヅルハ格段ノ好機會ト雖斯如ハ萬一ヲ僥倖スルニ過ギズ方今機砲ノ如キ利器ヲ各艦ニ備フルニ於テハ到底鐵竿水雷ノミニ依頼スルハ萬全ノ計ニアラズ凡潜水自動水雷ハ五百碼以下ノ距離ヨリ狙ヒテ定メテ發スルトキハ命中セザルコト稀レナリト信認致候然ルニ若山氏ノ意見亦其ノ謂レ無キニアラズト雖抑モ機彈雨降ノ際水雷全體ニ被ル毀損ハ暫ク甲乙輕重無シトスルモ之ヲ使用スル人員ニ於ケル感覺ハ少々ニアラズ依テ從來備付ケアル「スパー」水雷器具ハ一切除却シ別圖ノ如ク水雷發射管二個ヲシテ船首ニ裝載スル如ク改造可然ト存候右仰高裁候也

明治十七年十月二十七日

主船局長、軍事局長、水雷局長

十七年十一月十四日決裁

乃チ二十年頃ヨリ逐次第一號水雷艇以下ニ不取敢發射框ヲ裝備スルコトトナリシガ二十四年頃ヨリ漸ク發射管ニ換裝(艇首一門)セラルルニ至レリ明治二十年前後ニ於テ尙水雷艇ノ性能要目等ニ關シ確タル定説無ク爲ニ之ガ設計々畫ニ相當苦慮スル所アリシハ左記意見ヲ觀ルモ其ノ一端ヲ窺知シ得ベシ

水雷艇製造ニ關シ意見

(明治十九年八月提出)

造船課長 佐 雙 佐 仲

水雷艇ノ製造ハ近今歐洲各國ニ於テ著シク進歩スルモ未ダ其ノ形狀種類等ノ利害得失ニ於テハ衆說區々ニ涉リ何レカ其ノ良否ヲ判別難致有様ニシテ已ニ曩日右等ノ形勢探求ヲ兼テ該艇製造方註文ノ爲山口三<sub>三</sub> 技師ヲ英佛獨ノ三國へ被差遣候ニ付追テ同人ヨリモ右ニ關スル報告可有之事ニテ且先般英國耶社(御註文ノ裝甲水雷艇ノ如キハ是迄英佛等ニテ製出スル一<sub>一</sub>等<sub>一</sub>ニ比セバ其ノ形狀一層長大ニシテ實地交戦ニ臨テ其ノ奏効疑ナキモノノ如ク此ノ材料ハ目下横須賀造船所ニ到着シ不日組立可相成ニ付其ノ利害ノ如何ヲ實驗シ且前陳山口技師ヨリノ報告ヲ得テ該艇ノ製造所等御決定相成方可然ト思考ス

尙水雷艇ノ製造整備ニ關聯シ當時水雷運送船(水雷艇搭載運搬船ナリ)ノ必要ヲ唱道セラレ左記伺書ヲ見ルニ至レリ

水雷運送船 一隻 建造着手方伺

一、鋼製水雷運送船 但二等水雷艇八隻附屬ス 一隻

長二七〇呎 幅四二呎 排水量二七〇〇噸 實馬力三九五〇 速力一五節

炭量 四〇〇噸

砲裝 二五口徑十二姆克砲七門 機砲四門

航續力 全速力五〇時間 十海里二一三時間

右艦隊ニ附屬シ或ハ獨立進退シテ攻守共最モ有力ナルモノト思考致候間製造相成度別紙略圖相添此段一應相伺候也

十八年六月十一日

海軍卿 川村 純 義 殿

主船局長 海軍少將 赤 松 則 良

右ニ對シ軍事部長意見別紙第二ノ如クニシテ之ガ必要ヲ認メシガ本提案ハ備敎帥「ベルタン」ノ忠告ニ依リ棄却セラレタリ蓋シ同氏ノ述ブル所ニ依ルニ水雷艇ハ漸次其ノ形體ヲ増大スルノ趨勢ニ在リテ自

ラ獨力洋上航破ノ能力ヲ具備スルニ至ルベク搭載運搬船ノ如キハ財力ノ糜耗ニ屬スト云フニ在リ

此ノ間附記スベキハ二十三年佛國ニ註文ノ「ノルマン」型水雷艇一隻（八〇噸型―第二十一號）回航ノ意圖ヲ以テ二十三年七月回航委員伊地知彥次郎佛國ニ出張セシガ九月ニ至リ同艇ハ解體ノ上輸送ニ決シ同氏ハ渡佛後水雷艇收受事務取扱トナリシコト之ナリ

斯ル間ニ漸次大型水雷艇ノ建造ヲ見ルニ至リ二十四年七月當時ノ最大水雷艇小鷹ノ水雷公試發射成績及兵裝艦裝上ノ實驗ニ鑑ミ將來水雷艇建造計畫上大ニ得ルトコロアリ二十七、八年戰役直前ニ於テハ既成大小二十四隻ヲ算スルニ至レリ而シテ二十六年吳ニテ起工セル第二十五號艇ヲ以テ同戰役前建造艇ノ掉尾トス要目左ノ如シ

長一三〇、八七呎　排水量九二、七　速力二二、五節　發射管三　砲二

之ヨリ先キ明治二十五年海軍大演習アリ本州西部ニ於テ施行サレシガ水雷艇第五號以後ノ全水雷艇之ニ參加セリ蓋シ水雷艇ノ航洋的訓練ノ嚆矢ニシテ船體艦裝ニ多少ノ損傷アリ却ツテ好個ノ造艇資料ヲ得タルモノナリ

別紙第一

水雷艇へ「ホワイトヘッド」水雷ヲ備フル等ノ爲速力減シ方上答

水雷艇へ「ホワイトヘッド」水雷ヲ備ヘタル上「ノルテンフェルト」砲等ヲ備フルトキハ若干ノ速力ヲ減スベキヤ御下問ノ趣敬承取調  
候處左記ノ通ニ有之此段上答仕候也

十六年三月六日

主船局長ヨリ海軍卿宛

(記)

一、「ホワイトヘッド」一個附屬具共 但英國製ノ分

一、「ノルテンフェルト」砲臺挺彈藥三千發共

右ヲ水雷艇ニ備フルトキハ該艇速力凡ソ二分ノ一「ノット」餘減ズル常リニ候事

〔別紙〕略ス

別紙第二

水雷運送船製造ニ對スル意見

本紙何之趣ヲ察スルニ水雷運送船ノ目下必要タルハ固ヨリ異存無之候へ共左ノ件々御改正相成候方可然哉

一、本船ノ全速力ハ十五節トアルモ該船ノ如キハ一層進退ノ自在ナルヲ必要トス依テ速力ハ十七節以上ト御定相成度候事

二、本船ノ兵備ハ十二珊砲七門、機砲六門ノ計畫ノ處元來本船ハ水雷運送ノ目的ニテ其ノ一點ヨリ論ズルトキハ兵備ハ僅カニ防禦ノ目的ニ止メ速發砲、機砲ノ類ヲ以テスルモ可ナリ然ルニ之ニ砲備ヲ要スルノ理由ハ時機ニ從ヒ他ノ軍艦ト共ニ戦闘ニモ

使用セント欲スルガ爲ノミ果シテ然ラバ成ルベク攻撃ノ勢力ヲ具セシムルハ固ヨリ必要トス依テ船首ノ追撃法或ハ側砲ノ内  
二門或ハ四門ヲ十五珊瑚ニ交換相成度事

三、本船ハ水雷艇用トシテ少クモ十六個以上ノ魚形水雷ヲ搭載スルガ故ニ本船ニモ右發射管ヲ裝備相成度事

四、主船局ノ意見ニ依レバ本船ハ内國ニ於テ製造ノ見込ノ處此類ノ船艦ハ各國ニ於テモ新規ノ制式ニ係リ未ダ深ク經驗ニモ不涉  
儀ニ付初期ノ一隻ハ先ヅ外國へ御註文相成右制式等充分決定ノ上其ノ制式ニ模擬シ本邦ニテ製造相成可然乎

右意見開陳仕候也

明治十八年八月五日

軍 事 部 長